ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記

宮沢賢治

一、ペンネンネンネンネン・ネネムの独立

〔冒頭原稿数枚焼失〕のでした。実際、東のそらは、お「キレ」さまの出る前に、琥珀(こはく)色のビールで一杯(いっぱい)になるのでした。ところが、そのまま夏になりましたが、ばけものたちはみんな騒(さわ)ぎはじめました。

そのわけ〔十七字不明〕ばけもの麦も一向みのらず、大〔六字不明〕が咲いただけで一つぶも実になりませんでした。秋になっても全くその通〔七字不明〕栗(くり)の木さえ、ただ青いいがばかり、〔八字不明〕飢饉(ききん)になってしまいました。

その年は暮れましたが、次の春になりますと飢饉はもうとてもひどくなってしまいました。

ネネムのお父さん、森の中の青ばけものは、ある日頭をかかえていつまでもいつまでも考えていましたが、急に起きあがって、

「おれは森へ行って何かさがして来るぞ。」と云いながら、よろよろ家を出て行きましたが、それなりもういつまで待っても帰って来ませんでした。たしかにばけもの世界の天国に、行ってしまったのでした。

ネネムのお母さんは、毎日目を光らせて、ため息ばかり吐いていましたが、ある日ネネムとマミミとに、

「わたしは野原に行って何かさがして来るからね。」と云って、よろよろ家を出て行きましたが、やはりそれきりいつまで待っても帰って参りませんでした。たしかにお母さんもその天国に呼ばれて行ってしまったのでした。

ネネムは小さなマミミとただ二人、寒さと飢(う)えとにガタガタふるえて居(お)りました。

するとある日戸口から、

「いや、今日は。私はこの地方の飢饉を救(たす)けに来たものですがね、さあ何でも喰(た)べなさい。」と云いながら、一人の目の鋭(するど)いせいの高い男が、大きな籠(かご)の中に、

ワップルや葡萄パンや、そのほかうまいものを沢山入れて入って来たのでした。

二人はまるで籠を引ったくるようにして、ムシャムシャムシャムシャ、沢山喰べてから、やっと、

「おじさんありがとう。ほんとうにありがとうよ。」

なんて云ったのでした。

男は大へん目を光らせて、二人のたべる処をじっと見て居りましたがその時やっと口を開きました。

「お前たちはいい子供だね。しかしいい子供だというだけでは何にもならん。わしと一緒においで。いいとこへ連れてってやろう。尤も男の子は強いし、それ

にどうも膝（ひざ）やかかとの骨が固まってしまっているようだから仕方ないが、おい、女の子。おじさんとこへ来ないか。一日いっぱい葡萄パンを喰べさしてやるよ。」

　ネネムもマミミも何とも返事をしませんでしたが男はふいっとマミミをお菓子（かし）の籠の中へ入れて、

「おお、ホイホイ、おお、ホイホイ。」と云いながら俄（にわ）かにあわてだして風のように家を出て行きました。

　何のことだかわけがわからずきょろきょろしていたマミミ〔一字不明〕、戸口を出てからはじめてわっと泣き出しネネムは、

「どろぼう、どろぼう。」と泣きながら叫（さけ）んで追いかけ

ましたがもう男は森を抜(ぬ)けてずうっと向うの黄色な野原を走って行くのがちらっと見えるだけでした。マミミの声が小さな白い三角の光になってネネムの胸にしみ込(こ)むばかりでした。

ネネムは泣いてどなって森の中をうろうろうろうろうろはせ歩きましたがとうとう疲(つか)れてばたっと倒(たお)れてしまいました。

それから何日経(た)ったかわかりません。

ネネムはふっと目をあきました。見るとすぐ頭の上のばけもの栗の木がふっふっふっと湯気を吐(は)いていました。

その幹に鉄のはしごが両方から二つかかって二人の

男が登って何かしきりにつなをたぐるような網を投げるようなかたちをやって居りました。
　ネネムは起きあがって見ますとお「キレ」さまはすっかりふだんの様になっておまけにテカテカして何でも今朝あたり顔をきれいに剃ったらしいのです。
　それにかれ草がほかほかしてばけものわらびなどもふらふらと生え出しています。ネネムは飛んで行ってそれをむしゃむしゃたべました。するとネネムの頭の上でいやに平べったい声がしました。
「おい。子供。やっと目がさめたな。まだお前は飢饉のつもりかい。もうじき夏になるよ。すこしおれに手

伝わないか。」

見るとそれは実に立派なばけもの紳士でした。貝殻でこしらえた外套を着て水煙草を片手に持って立っているのでした。

「おじさん。もう飢饉は過ぎたの。手伝いって何を手伝うの。」

「昆布取りさ。」

「ここで昆布がとれるの。」

「取れるとも。見ろ。折角やってるじゃないか。」

なるほどさっきの二人は一生けん命網をなげたりそれを繰ったりしているようでしたが網も糸も一向見え

ませんでした。

「あれでも昆布がとれるの。」

「あれでも昆布がとれるのかって。いやな子供だな。おい、縁起（えんぎ）でもないぞ。取れもしないところにどうして工場なんか建てるんだ。取れるともさ。現におれはじめ沢山のものがそれでくらしを立てているんじゃないか。」

ネネムはかすれた声でやっと

「そうですか。おじさん。」と云いました。

「それにこの森はすっかりおれの森なんだからさっきのように勝手にわらびなんぞ取ることは疾（と）うに差し止

めてあるんだぞ。」

ネネムは大変いやな気がしました。紳士は又云いました。

「お前もおれの仕事に手伝え。一日一ドルずつ手間をやるぜ。そうでもしなかったらお前は飯を食えまいぜ。」

ネネムは泣き出しそうになりましたがやっとこらえて云いました。

「おじさん。そんなら僕（ぼく）手伝うよ。けれどもどうして昆布を取るの。」

「ふん。そいつは勿論（もちろん）教えてやる。いいか、そら。」紳

士はポケットから小さく畳(たた)んだ洋傘(こうもりがさ)の骨のようなものを出しました。

「いいか。こいつを延ばすと子供の使うはしごになるんだ。いいか。そら。」

　紳士はだんだんそれを引き延ばしました。間もなく長さ十米(メートル)ばかりの細い細い絹糸でこさえたようなはしごが出来あがりました。

「いいかい。こいつをね。あの栗の木に掛(か)けるんだよ。ああ云う工合(ぐあい)にね。」紳士はさっきの二人の男を指さしました。二人は相かわらず見えない網や糸をまっさおな空に投げたり引いたりしています。

　紳士ははしごを栗の樹（き）にかけました。
「いいかい。今度はおまえがこいつをのぼって行くんだよ。そら、登ってごらん。」
　ネネムは仕方なくはしごにとりついて登って行きましたがはしごの段々がまるで針金のように細くて手や、足に喰（く）い込んでちぎれてしまいそうでした。
「もっと登るんだよ。もっと。そら、もっと。」下では紳士が叫んでいます。ネネムはすっかり頂上まで登りました。栗の木の頂上というものはどうも実に寒いのでした。それに気がついて見ると自分の手からまるで蜘蛛（くも）の糸でこしらえたようなあやしい網がぐらぐらゆ

れながらずうっと青空の方へひろがっているのです。そのぐらぐらはだんだん烈しくなってネネムは危なく下に落ちそうにさえなりました。

「そら、網があったろう。そいつを空へ投げるんだよ。手がぐらぐら云うだろう。そいつはね、風の中のふかやさめがつきあたってるんだ。おや、お前はふるえてるね。意気地なしだなあ。投げるんだよ、投げるんだよ。そら、投げるんだよ。」

ネネムは何とも云えず厭な心持がしました。けれども仕方なく力一杯にそれをたぐり寄せてそれからあらんかぎり上の方に投げつけました。すると目がぐるぐ

るっとして、ご機嫌（きげん）のいいおキレさままでがまるで黒い土の球（たま）のように見えそれからシュウとはしごのてっぺんから下へ落ちました。もう死んだとネネムは思いましたがその次にもう耳が抜けたとネネムは思いました。というわけはネネムはきちんと地面の上に立っていて紳士がネネムの耳をつかんでぶりぶり云いながら立っていました。

「お前もいくじのないやつだ。何というふにゃふにゃだ。俺（おれ）が今お前の耳をつかんで止めてやらなかったらお前は今ごろは頭がパチンとはじけていたろう。おれはお前の大恩人ということになっている。これから失

礼をしてはならん。ところでさあ、登れ。登るんだよ。夕方になったらたべものも送ってやろう。夜になったら綿のはいったチョッキもやろう。さあ、登れ。」

「夕方になったら下へ降りて来るんでしょう。」

「いいや。そんなことがあるもんか。とにかく昆布がとれなくちゃだめだ。どれ一寸（ちょっと）網を見せろ。」

紳士はネネムの手にくっついた網をたぐり寄せて中をあらためました。網のずうっとはじの方に一寸四方ばかりの茶色なヌラヌラしたものがついていました。
紳士はそれを取って

「ふん、たったこれだけか。」と云いながらそれでも少

し笑ったようでした。そしてネネムは又はしごを上って行きました。

やっと頂上へ着いて又力一杯空に網を投げました。それからわくわくわくする足をふみしめふみしめ網を引き寄せて見ましたが中にはなんにもはいっていませんでした。

「それ、しっかり投げろ。なまけるな。」下では紳士が叫んでいます。ネネムはそこで又投げました。やっぱりなんにもありません。又投げました。やっぱり昆布ははいりません。

つかれてヘトヘトになったネネムはもう何でも構わ

ないから下りて行こうとしました。すると愕いたことにははしごがありませんでした。

そしてもう夕方になったと見えてばけものぞらは緑色になり変なばけものパンが下の方からふらふらのぼって来てネネムの前にとまりました。紳士はどこへ行ったか影もかたちもありません。

向うの木の上の二人もしょんぼりと頭を垂れてパンを食べながら考えているようすでした。その木にも鉄のはしごがもう見えませんでした。

ネネムも仕方なくばけものパンを嚙じりはじめました。

その時紳士が来て、

「さあ、たべてしまったらみんな早く網を投げろ。昆布を一斤（きん）とらないうちは綿のはいったチョッキをやらんぞ。」とどなりました。

ネネムは叫びました。

「おじさん。僕もうだめだよ。おろしてお呉（く）れ。」

紳士が下でどなりました。

「何だと。パンだけ食ってしまってあとはおろしてお呉れだと。あんまり勝手なことを云うな。」

「だってもううごけないんだもの。」

「そうか。それじゃ動けるまでやすむさ。」と紳士が

云いました。ネネムは栗の木のてっぺんに腰（こし）をかけてつくづくとやすみました。

その時栗の木が湯気をホッホッと吹（ふ）き出しましたのでネネムは少し暖まって楽になったように思いました。そこで又元気を出して網を空に投げました。空では丁度星が青く光りはじめたところでした。

ところが今度の網がどうも実に重いのです。ネネムはよろこんでたぐり寄せて見ますとたしかに大きな大きな昆布が一枚ひらりとはいって居りました。

ネネムはよろこんで

「おじさん。さあ投げるよ。とれたよ。」

と云いながらそれを下へ落しました。
「うまい、うまい。よし。さあ綿のチョッキをやるぜ。」
チョッキがふらふらのぼって来ました。ネネムは急いでそれを着て云いました。
「おじさん。一ドル呉れるの。」
紳士が下の浅黄色のもやの中で云いました。
「うん。一ドルやる。しかしパンが一日一ドルだからな。一日十斤以上こんぶを取ったらあとは一斤十セントで買ってやろう。そのよけいの分がおまえのもうけさ。ためて置いていつでも払ってやるよ。その代り十

斤に足りなかったら足りない分がお前の損さ。その分かしにして置くよ。」

　ネネムは実にがっかりしました。向うの木の二人の男はもういくら星あかりにすかして見ても居ないようでした。きっとあんまり仕事がつらくて消滅（しょうめつ）してしまったのでしょう。さてネネムは決心しました。それからよるもひるも栗の木の湯気とばけものパンと見えない網と紳士と昆布と、これだけを相手にして実に十年というものこの仕事をつづけました。これらの対手（あいて）の中でもパンと昆布とがまず大将でした。はじめの四年は毎日毎日借りばかり次の五年でそれを払いおしま

いの三ヶ月でお金がたまりました。そこで下に降りてたまった三百ドルをふところにしてばけもの世界のまちの方へ歩き出しました。

二、ペンネンネンネンネン・ネネムの立身

ペンネンネンネンネン・ネネムは十年のあいだ木の上に直立し続けた為（ため）にしきりに痛む膝（ひざ）を撫（な）でながら、森を出て参りました。森の出口に小さな雑貨商がありましたので、ネネムは店にはいって、まっ黒な上着とズボンを一つ買いました。それから急いでそれを着な

がら考えました。

「何か学問をして書記になりたいもんだな。もう投げるようなたぐるようなことは考えただけでも命が縮まる。よしきっと書記になるぞ。」

ペンネンネンネンネン・ネネムはお銭(あし)を払って店を出る時ちらっと向うの姿見にうつった自分の姿を見ました。

着物が夜のようにまっ黒、縮れた赤毛が頭から肩(かた)にふさふさ垂れまっ青な眼(め)はかがやきそれが自分だかと疑った位立派でした。

ネネムは嬉(うれ)しくて口笛(くちぶえ)を吹いてただ一息に三十ノッ

トばかり走りました。
「ハンムンムンムンムン・ムムネの市まで、もうどれ位ありましょうか。」とペンネンネンネンネン・ネネムが、向うからふらふらやって来た黄色な影法師のばけ物にたずねました。
「そうだね。一寸ここまでおいで。」その黄色な幽霊は、ネネムの四角な袖のはじをつまんで、一本のばけものりんごの木の下まで連れて行って、自分の片足をりんごの木の根にそろえて置いて云いました。
「あなたも片足をここまで出しなさい。」
ネネムは急いでその通りしますとその黄色な幽霊は、

屈（かが）んで片っ方の目をつぶって、足さきがりんごの木の根とよくそろっているか検査したあとで云いました。
「いいか。ハンムンムンムンムン・ムムネ市の入口までは、丁度この足さきから六ノット六チェーンあるよ。それでは途中（とちゅう）気をつけておいで。」そしてくるっとまわって向うへ行ってしまいました。
　ネネムはそのうしろから、ていねいにお辞儀をして、
「ああありがとうございます。六ノット六チェーンならば、私が一時間一ノット一チェーンずつあるきますと六時間で参れます。一時間三ノット三チェーンずつあるきますと二時間で参れます。すっかり見当がつき

まして、こんなうれしいことはありません。」と云いながら、もう一つ頭を下げました。赤毛はじゃらんと下に垂(さ)がりましたけれども、実は黄色の幽霊はもうずうっと向うのばけもの世界のかげろうの立つ畑の中にでもはいったらしく、影もかたちもありませんでした。

そこでネネムは又あるき出しました。すると又向うから無暗(むやみ)にぎらぎら光る鼠(ねずみ)色の男が、赤いゴム靴(ぐつ)をはいてやって参りました。そしてネネムをじろじろ見ていましたが、突然(とつぜん)そばに走って来て、ネネムの右の手首をしっかりつかんで云いました。

「おい。お前は森の中の昆布(こんぶ)採りがいやになってこっ

ちへ出て来た様子だが、一体これから何が目的だ。」
ネネムはこれはきっと探偵にちがいないと思いましたので、堅くなって答えました。
「はい。私は書記が目的であります。」
するとその男は左手で短いひげをひねって一寸考えてから云いました。
「ははあ、書記が目的か。して見ると何だな。お前は森の中であんまりばけもののパンばかり喰ったな。」
ネネムはすっかり図星をさされて、面くらって左手で頭を掻きました。
「はい実は少少たべすぎたかと存じます。」

「そうだろう。きっとそうにちがいない。よろしい。お前の身分や考えはよく諒解（りょうかい）した。行きなさい。わしはムムネ市の刑事だ。」

ネネムはそこでやっと安心してていねいにおじぎをして又町の方へ行きました。

丁度一時間と六分かかって、三ノット三チェーンを歩いたとき、ネネムは一人の百姓のおかみさんばけものと会いました。その人は遠くからいかにも不思議そうな顔をして来ましたが、とうとう泣き出してかけ寄りました。

「まあ、クエクや。よく帰っておいでだね。まあ、お

前はわたしを忘れてしまったのかい。ああなさけない。」
　ネネムは少し面くらいましたが、ははあ、これはきっと人ちがいだと気がつきましたので急いで云いました。
「いいえ、おかみさん。私はクエクという人ではありません。私はペンネンネンネンネン・ネネムというのです。」
　するとその橙（だいだい）色の女のばけものはやっと気がついたと見えて俄（にわ）かに泣き顔をやめて云いました。
「これはどうもとんだ失礼をいたしました。あなたのおなりがあんまりせがれそっくりなもんですから。」

「いいえ。どう致しまして。私は今度はじめてムムネの市に出る処です。」

「まあ、そうでしたか。うちのせがれも丁度あなたと同じ年ころでした。まあ、お髪のちぢれ工合から、お耳のキラキラする工合、何から何までそっくりです。それにまあ、なめくじばけもののような柔らかなおあしに、硬いはがねのわらじをはいて、なにが御志願でいらしゃるのやら。おお、うちのせがれもこんなわらじでどこを今ごろ、ポオ、ポオ、ポオ、ポオ。」とそのおかみさんばけものは泣き出しました。ネネムは困って、

「ね、おかみさん。あなたのむすこさんは、もうきっとどこかの書記になってるんでしょう。きっとじきお迎(むか)いをよこすにちがいありません。そんなにお泣きなさらなくてもいいでしょう。私は急ぎますからこれで失礼いたします。」と云いながらクラリオネットのようなすすり泣きの声をあとに、急いでそこを立ち去りました。

　さてそれから十五分でネネムはムムネの市までもう三チェーンの所まで来ました。ネネムはそこで髪(かみ)をすっかり直して、それから路(みち)ばたの水銀の流れで顔を洗い、市にはいって行く支度(したく)をしました。

それからなるべく心を落ちつけてだんだん市に近づきますと、さすがはばけもの世界の首府のけはいは、早くもネネムに感じました。

ノンノンノンノンノンノンノンといううなりは地の〔以下原稿数枚分焼失〕

「今授業中だよ。やかましいやつだ。用があるならはいって来い。」とどなりましたので、学校の建物はぐらぐらしました。

ネネムはそこで思い切って、なるべく足音を立てないようにニ階にあがってその教室にはいりました。教

室の広いことはまるで野原です。さまざまの形、とうがらしや、臼や、鋏や、赤や白や、実にさまざまの学生のばけものがぎっしりです。向うには大きな崖のくらいある黒板がつるしてあって、せの高さ百尺あまりのさっきの先生のばけものが、講義をやって居りました。

「それでその、もしも塩素が赤い色のものならば、これは最も明らかな不合理である。黄色でなくてはならん。して見ると黄色という事はずいぶん大切なもんだ。黄という字はこう書くのだ。」

先生は黒板を向いて、両手や鼻や口や肱やカラアや

髪の毛やなにかで一ぺんに三百ばかり黄という字を書きました。生徒はみんな大急ぎで筆記帳に黄という字を一杯（いっぱい）書きましたがとても先生のようにうまくは出来ません。

ネネムはそっと一番うしろの席に座（すわ）って、隣（とな）りの赤と白のまだらのばけもの学生に低くたずねました。

「ね、この先生は何て云うんですか。」

「お前知らなかったのかい。フゥフィーボー博士さ。化学の。」とその赤いばけものは馬鹿（ばか）にしたように目を光らせて答えました。

「あっ、そうでしたか。この先生ですか。名高い人な

んですね。」とネネムはそっとつぶやきながら自分もふところから鉛筆と手帳を出して筆記をはじめました。

その時教室にパッと電燈がつきました。もう夕方だったのです。博士が向うで叫んでいます。

「しからば何が故に夕方緑色が判然とするか。けだしこれはプウルウキインイイの現象によるのである。プウルウキインイイとはこう書く。」

博士はみみずのような横文字を一ぺんに三百ばかり書きました。ネネムも一生けん命書きました。それから博士は俄かに手を大きくひろげて

「げにも、かの天にありて濛々たる星雲、地にありて

はあいまいたるばけ物律、これはこれ宇宙を支配す。」と云いながらテーブルの上に飛びあがって腕を組み堅く口を結んできっとあたりを見まわしました。

学生どもはみんな興奮して

「ブラボオ。フゥフィーボー先生。ブラボオ。」と叫んでそれからバタバタ、ノートを閉じました。ネネムもすっかり釣り込まれて、

「ブラボオ。」と叫んで堅く堅く決心したように口を結びました。この時先生はやっとほんのすこうし笑って一段声を低くして云いました。

「みなさん。これからすぐ卒業試験にかかります。一

人ずつ私の前をお通りなさい。」と云いました。
学生どもは、そこで一人ずつ順々に、先生の前を通りながらノートを開いて見せました。
先生はそれを一寸見てそれから一言か二言質問をして、それから白墨（はくぼく）でせなかに「及」とか「落」とか「同情及」とか「退校」とか書くのでした。
書かれる間学生はいかにもくすぐったそうに首をちぢめているのでした。書かれた学生は、いかにも気がかりらしく、そっと肩をすぼめて廊下（ろうか）まで出て、友達に読んで貰（もら）って、よろこんだり泣いたりするのでした。
ぐんぐんぐんぐん、試験がすんで、いよいよネネム一

人になりました。ネネムがノートを出した時、フゥフィーボー博士は大きなあくびをやりましたので、ノートはスポリと先生に吸い込まれてしまいました。先生はそれを別段気にかけるでもないらしく、コクッと呑(の)んでしまって云いました。

「よろしい。ノートは大へんによく出来ている。そんなら問題を答えなさい。煙突(えんとつ)から出るけむりには何種類あるか。」

「四種類あります。もしその種類を申しますならば、黒、白、青、無色です。」

「うん。無色の煙(けむり)に気がついた所は、実にどうも偉(えら)い。

そんなら形はどうであるか。」

「風のない時はたての棒、風の強い時は横の棒、その他はみみずなどの形。あまり煙の少ない時はコルク抜きのようにもなります。」

「よろしい。お前は今日の試験では一等だ。何か望みがあるなら云いなさい。」

「書記になりたいのです。」

「そうか。よろしい。わしの名刺に向うの番地を書いてやるから、そこへすぐ今夜行きなさい。」

ネネムは名刺を呉れるかと思って待っていますと、博士はいきなり白墨をとり直してネネムの胸に、「セ

ム二十二号。」と書きました。

ネネムはよろこんで叮寧におじぎをして先生の処から一足退きますと先生が低く、

「もう藁のオムレツが出来あがった頃だな。」と呟やいてテーブルの上にあった革のカバンに白墨のかけらや講義の原稿やらを、みんな一緒に投げ込んで、小脇にかかえ、さっき顔を出した窓からホイッと向うの向うの黒い家をめがけて飛び出しました。そしてネネムはまちをこめた黄色の夕暮の中の物干台にフゥフィーボー博士が無事に到着して家の中に入って行くのをたしかに見ました。

そこでネネムは教室を出てはしご段を降りますと、そこには学生が実に沢山泣いていました。全く三千六百五十三回、則ち閏年も入れて十年という間、日曜も夏休みもなしに落第ばかりしていては、これが泣かないでいられましょうか。けれどもネネムは全くそれとは違います。

元気よく大学校の門を出て、自分の胸の番地を指さして通りかかったくらげのようなばけものに、どう行ったらいいかをたずねました。

するとそのばけものは、ひどく叮寧におじぎをして、

「ええ。それは世界裁判長のお邸でございます。こ

こから二チェーンほどおいでになりますと、大きな粘土（ねんど）でかためた家がございます。すぐおわかりでございましょう。どうか私もよろしくお引き立てをねがいます。」と云って又叮寧（また）におじぎをしました。

ネネムはそこで一時間一ノット一チェーンの速さで、そちらへ進んで参りました。たちまち道の右側に、その粘土作りの大きな家がしゃんと立って、世界裁判長官邸（かんてい）と看板がかかって居りました。

「ご免なさい。ご免なさい。」とネネムは赤い髪を掻（か）きながら云いました。

すると家の中からペタペタペタペタ沢山の沢山のば

けものどもが出て参りました。

みんなまっ黒な長い服を着て、恭々（うやうや）しく礼をいたしました。

「私は大学校のフゥフィーボー先生のご紹介（しょうかい）で参りましたが世界裁判長に一寸お目にかかれましょうか。」

するとみんなは口をそろえて云いました。

「それはあなたでございます。あなたがその裁判長でございます。」

「なるほど、そうですか。するとあなた方は何ですか。」

「私どもはあなたの部下です。判事や検事やなんかで

す。」

「そうですか。それでは私はここの主人ですね。」

「さようでございます。」

こんなような訳でペンネンネンネンネン・ネネムは一ぺんに世界裁判長になって、みんなに囲まれて裁判長室の海綿でこしらえた椅子（いす）にどっかりと座りました。

すると一人の判事が恭々しく申しました。

「今晩開廷の運びになっている件が二つございますが、いかがでございましょうお疲（つか）れでいらっしゃいましょうか。」

「いいや、よろしい。やります。しかし裁判の方針は

どうですか。」
「はい。裁判の方針はこちらの世界の人民が向うの世界になるべく顔を出さぬように致したいのでございます。」
「わかりました。それではすぐやります。」
ネネムはまっ白なちぢれ毛のかつらを被（かぶ）って黒い長い服を着て裁判室に出て行きました。部下がもう三十人ばかり席についています。
ネネムは正面の一番高い処に座りました。向うの隅（すみ）の小さな戸口から、ばけものの番兵に引っぱられて出て来たのはせいの高い眼（め）の鋭（するど）い灰色のやつで、片手

にほうきを持って居りました。一人の検事が声高く書類を読み上げました。

「ザシキワラシ。二十二歳（さい）。アツレキ三十一年二月七日、表、日本岩手県上閉伊（かみへい）郡青笹（あおざさ）村字（あざ）瀬戸二十一番戸伊藤万太の宅、八畳座敷中に故なくして擅（ほしいまま）に出現して万太の長男千太、八歳を気絶せしめたる件。」

「よろしい。わかった。」とネネムの裁判長が云いました。

「姓名年齢（ねんれい）、その通りに相違（そうい）ないか。」

「相違ありません。」

「その方はアツレキ三十一年二月七日、伊藤万太方の

八畳座敷に故なくして擅に出現したることは、しかとその通りに相違ないか。」
「全く相違ありません。」
「出現後は何を致した。」
「ザシキをザワッザワッと掃（は）いて居りました。」
「何の為（ため）に掃いたのだ。」
「風を入れる為です。」
「よろしい。その点は実に公益である。本官に於（おい）て大いに同情を呈（てい）する。しかしながらすでに妄（みだ）りに人の居ない座敷の中に出現して、箒（ほうき）の音を発した為に、その音に愕（おど）ろいて一寸のぞいて見た子供が気絶をしたとな

れば、これは明らかな出現罪である。依(よ)って今日より七日間当ムムネ市の街路の掃除を命ずる。今後はばけもの世界長の許可なくして、妄りに向う側に出現することはならん。」

「かしこまりました。ありがとうございます。」

「実に名断だね。どうも実に今度の長官は偉い。」と判事たちは互(たがい)にささやき合いました。

ザシキワラシはおじぎをしてよろこんで引っ込みました。

次に来たのは鳶(とび)色と白との粘土で顔をすっかり隈取(くまど)って、口が耳まで裂(さ)けて、胸や足ははだかで、腰(こし)

に厚い蓑（みの）のようなものを巻いたばけものでした。一人の判事が書類を読みあげました。

「ウウウエイ。三十五歳。アツレキ三十一年七月一日夜、表、アフリカ、コンゴオの林中の空地に於て故なくして擅（ほしいまま）に出現、舞踏（ぶとう）中の土地人を恐怖（きょうふ）散乱せしめたる件。」

「よろしい、わかった。」とネネムは云いました。

「姓名年齢その通りに相違ないか。」

「へい。その通りです。」

「その方はアツレキ三十一年七月一日夜、アフリカ、コンゴオの林中空地に於て、故なくして擅に出現、

折柄(おりから)月明によって歌舞、歓をなせる所の一群を恐怖散乱せしめたことは、しかとその通りにちがいないか。」

「全くその通りです。」

「よろしい。何の目的で出現したのだ。既(すで)に法律上故なく擅となってあるが、その方の意中を今一応尋(たず)ねよう。」

「へい。その実は、あまり面白(おもしろ)かったもんですから。へい。どうも相済みません。あまり面白かったんで。ケロ、ケロ、ケロ、ケロロ、ケロ、ケロ。」

「控(ひか)えろ。」

「へい。全くどうも相済みません。恐(おそ)れ入りました。」

「うん。お前は、最明らかな出現罪である。依って明日より二十二日間、ムッセン街道の見まわりを命ずる。今後ばけものの世界長の許可なくして、妄りに向側に出現いたしてはならんぞ。」

「かしこまりました。ありがとうございます。」そのばけものも引っ込みました。

「実に名断だ。いい判決だね。」とみんなささやき合いました。その時向うの窓がガタリと開いて

「どうだ、いい裁判長だろう。みんな感心したかい。」

と云う声がしました。それはさっきの灰色の一メートルある顔、フウフィーボー先生でした。

「ブラボオ。フゥフィーボー博士。ブラボオ。」と判事も検事もみんな怒鳴(どな)りました。その時はもう博士の顔は消えて窓はガタンとしまりました。

そこでネネムは自分の室(へや)に帰って白いちぢれ毛のかつらを除(と)りました。それから寝(ね)ました。

あとはあしたのことです。

三、ペンネンネンネンネン・ネネムの巡視(じゅんし)

ばけもの世界裁判長になったペンネンネンネンネンネン・ネネムは、次の朝六時に起きて、すぐ部下の検事

を一人呼びました。

「今日は何時に公判の運びになっているか。」

「本日もやはり晩の七時から二件だけございます。」

「そうか。よろしい。それでは今朝は八時から世界長に挨拶（あいさつ）に出よう。それからすぐ巡視だ。みんなその支度（したく）をしろ。」

「かしこまりました。」

そこでペンネンネンネンネン・ネネムは、燕麦（オート）を一把（わ）と、豆汁（まめじる）を二リットルで軽く朝飯をすまして、それから三十人の部下をつれて世界長の官邸に行きました。

ばけもの世界長は、もう大広間の正面に座って待っ

ています。世界長は身のたけ百九十尺もある中世代の瑪瑙木（めのうぼく）でした。

ペンネンネンネンネン・ネネムは、恭々しく進んで片膝（かたひざ）を床につけて頭を下げました。

「ペンネンネンネンネン・ネネム裁判長はおまえであるか。」

「さようでございます。永久に忠勤を誓（ちか）い奉（たてまつ）ります。」

「うん。しっかりやって呉（く）れ。ゆうべの裁判のことはもう聞いた。それに今朝はこれから巡視に出るそうだな。」

「はい。恐れ入ります。」
「よろしい。どうかしっかりやって呉れ。」
「かしこまりました。」

　そこでペンネンネンネンネン・ネネムは又うやうやしく世界長に礼をして、後戻(あともど)りして退きました。三十人の部下はもう世界長の首尾がいいので大喜びです。ペンネンネンネンネン・ネネムも大機嫌(だいきげん)でそれから町を巡視しはじめました。

　ばけもの世界のハンムンムンムンムン・ムムネ市の盛(さか)んなことは、今日とて少しも変りません。億百万のばけものどもは、通り過ぎ通りかかり、行きあい行き

過ぎ、発生し消滅し、聯合し融合し、再現し進行し、それはそれは、実にどうも見事なもんです。ネネムもいまさらながら、つくづくと感服いたしました。
その時向うから、トッテントッテントッテンテンと、チャリネルという楽器を叩いて、小さな赤い旗をたてた車が、ほんの少しずつこっちへやって来ました。見物のばけものがまるで赤山のようにそのまわりについて参ります。
ペンネンネンネンネン・ネネムは、行きあいながらふと見ますと、その赤い旗には、白くフクジロと染め抜いてあって、その横にせいの高さ三尺ばかりの、顔

がまるでじじぃのように皺(しわ)くちゃな殊(こと)に鼻が一尺ばかりもある怖(こわ)い子供のようなものが、小さな半ずぼんをはいて立ち、車を引っ張っている黒い硬(かた)いばけものから、「フクジロ印」という商標のマッチを、五つばかり受け取っていました。ネネムは何をするのかと思ってもっと見ていますと、そのいやなものはマッチを持ってよちよち歩き出しました。

　赤山のようなばけものの見物は、わいわいそれについて行きます。一人の若いばけものが、うしろから押されてちょっとそのいやなものにさわりましたら、そのフクジロといういやなものはくるりと振り向いて、

いきなりピシャリとその若ばけものの頬ぺたを撲りつけました。

それからいやなものは向うの荒物屋に行きました。その荒物屋というのは、ばけもの歯みがきや、ばけものの楊子や、手拭やずぼん、前掛などまで、すべてばけもの用具一式を売っているのでした。

フクジロがよちよちはいって行きますと、荒物屋のおかみさんは、怖がって逃げようとしました。おかみさんだって顔がまるで貘のようで、立派なばけものでしたが、小さくてしわくちゃなフクジロを見ては、もうすっかりおびえあがってしまったのでした。

「おかみさん。フクジロ・マッチ買ってお呉れ。」
おかみさんはやっと気を落ちつけて云いました。
「いくらですか。ひとつ。」
「十円。」
おかみさんは泣きそうになりました。
「さあ買ってお呉れ。買わなかったら踊をやるぜ。」
「買います、買います。踊の方はいりません。そら、十円。」おかみさんは青くなってブルブルしながら銭函からお金を集めて十円出しました。
「ありがとう。ヘン。」と云いながらそのいやなものは店を出ました。

そして今度は、となりのばけもの酒屋にはいりました。見物はわいわいついて行きます。酒屋のはげ頭のおじいさんばけものも、やっぱりぶるぶるしながら十円出しました。

その隣(となり)はタン屋という店でしたが、ここでも主人が黄色な顔を緑色にしてふるえながら、十円でマッチ一つ買いました。

「これはいかん。実にけしからん。こう云ういやなものが町の中を勝手に歩くということはおれの恥辱(ちじょく)だ。いいからひっくくってしまえ。」とペンネンネンネンネンネン・ネネムは部下の検事に命令しました。一人の検

事がすぐ進んで行ってタン屋の店から出て来るばかりのそのいやなものをくるくる十重（とえ）ばかりにひっくくってしまいました。ペンネンネンネンネン・ネネムがみんなを押（お）し分けて前に出て云いました。

「こら。その方は自分の顔やかたちのいやなことをいいことにして、一つ一銭のマッチを十円ずつに家ごと押しつけてあるく。悪いやつだ。監獄（かんごく）に連れて行くからそう思え。」

するとそのいやなものは泣き出しました。

「巡査さん。それはひどいよ。僕（ぼく）はいくらお金を貰（もら）ったって自分で一銭もとりはしないんだ。みんな親方が

しまってしまうんだよ。許してお呉れ。許してお呉れ。」

　ネネムが云いました。

「そうか。するとお前は毎日ただ引っぱり廻(まわ)されて稼(かせ)がせられる丈(だ)けだな。」

「そうだよ、そうだよ。僕を太夫(たいふ)さんだなんて云いながら、ひどい目にばかりあわすんだよ。ご飯さえ碌(ろく)に呉れないんだよ。早く親方をつかまえてお呉れ。早く、早く。」今度はそのいやなものが俄(にわ)かに元気を出しました。

　そこで

「あの車のとこに居るものを引っくくれ。」とネネムが云いました。丁度出て来た巡査が三人ばかり飛んで行って、車にポカンと腰掛けて居た黒い硬いばけものを、くるくるくるっと縛ってしまいました。ネネムはいやなものと一緒にそっちへ行きました。

「こら。きさまはこんなかたわなあわれなものをだしにして、一銭のマッチを十円ずつに売っている。さあ監獄へ連れて行くぞ。」

親方が泣き出しそうになって口早に云いました。

「お役人さん。そいつぁあんまり無理ですぜ。わしぁ一日一杯あるいてますがやっと喰うだけしか貰わない

んです。あとはみんな親方がとってしまうんです。」
「ふん、そうか。その親方はどこに居るんだ。」
「あすこに居ます。」
「どれだ。」
「あのまがり角でそらを向いてあくびをしている人です。」
「よし。あいつをしばれ。」まがり角の男は、しばられてびっくりして、口をパクパクやりました。ネネムは二人を連れてそっちへ歩いて行って云いました。
「こらきさまは悪いやつだ。何も文句を云うことはない。監獄にはいれ。」

「これはひどい。一体どうしたのです。ははあ、フクジロもタンイチもしばられたな。その事ならなあに私はただこうやって監督(かんとく)に云いつかって車を見ている丈(だけ)でございます。私は日給三十銭の外に一銭だって貰やしません。」

「ふん。どうも実にいやな事件だ。よし、お前の監督はどこに居るか、云え。」

「向うの電信柱の下で立ったまま居睡(いねむ)りをしているあの人です。」

「そうか。よろしい。向うの電信ばしらの下のやつを縛(しば)れ。」巡査や検事がすぐ飛んで行こうとしました。

その時ネネムは、ふともっと向うを見ますと、大抵五間隔きぐらいに、あくびをしたりうでぐみをしたり、ぼんやり立っているものがまだまだたくさん続いています。そこでネネムが云いました。

「一寸待て。まだ向うにも監督が沢山居るようだ。よろしい。順ぐりにみんなしばって来い。一番おしまいのやつを逃がすなよ。さあ行け。」

十人ばかりの検事と十人ばかりの巡査がふうとけむりのように向うへ走って行きました。見る見る監督どもが、みんなペタペタしばられて十五分もたたないうちに三十人というばけものが一列にずうっとつづいて

ひっぱられて来ました。
「一番おしまいのやつはこいつか。」とネネムが緑色の大へんハイカラなばけものをゆびさしました。
「そうです。」みんなは声をそろえて云います。
「よろしい。こら。その方は、あんなあわれなかたわを使って一銭のマッチを十円に売っているとは一体どう云うわけだ。それに三十二人も人を使って、あくまで自分の悪いことをかくそうとは実にけしからん。さあどうだ。」
ところが緑色のハイカラなばけものは口を尖(とが)らして、一向恐れ入りません。

「これはけしからん。私はそんなことをした覚えはない。私は百二十年前にこの方に九円だけ貸しがあるので今はもう五千何円になっている。わしはこの方のあとをつけて歩いて毎日、日プで三十円ずつとる商売なんだ。」と云いながら自分の前のまっ赤なハイカラなばけものを指さしました。

するとその赤色のハイカラが云いました。

「その通りだ。私はこの人に毎日三十円ずつ払う。払っても払っても元金は殖えるばかりだ。それはとにかく私は又この前のお方に百四十年前に非常な貸しがあるのでそれをもとでに毎日この人について歩いて実

は五十円ずつとっているのだ。マッチの罪とかなんとか一向私はしらない。」と云いながら自分の前の青い色のハイカラなばけものを指さしました。すると青いのが云いました。

「その通りだ。わしは毎日五十円ずつ払う。そしてわしはこの前のお方に二百年前かなりの貸しがあるのでそれをもとでに毎日ついて歩いて百円ずつとるだけなのだ。」

指されたその前の黄色なハイカラが云いました。

「そうだ。その通りだ。そしてわしはこの前のお方に昔すてきなかしがあるので、毎日ついて歩いて三百円

ずっとるのだ。」
「ふうん。大分わかって来たぞ。あとはもう貸した年と今とる金だかだけを云え。」とネネムが申しました。
「二百五十年五百円」「三百年、千円」「三百一年、千七円」「三百二年、千八円」「三百三年、千九円」「三百四年、千十円。」
ネネムはすばやく勘定しました。
「もうわかった。第三十番。電信柱の下の立ちねむり。おまえは千三十円とっているだろう。」
「全くさようでございます。ご明察恐れ入ります。」
その時さっきの角のところに立って、あくびをして

いた監督が云いました。
「どうです。そうでしょう。私は毎日千三十円三十銭だけとって、千三十円だけこの人に納めるのです。」
ネネムが云いました。
「そうか。すると一体誰がフクジロを使って歩かせているのだ。」
「私にはわかりません。私にはわかりません。」とみんなが一度に云いました。そこでネネムも一寸困りましたがしばらくたってから申しました。
「よし。そんならフクジロのマッチを売っていることを知っているものは手をあげ。」

硬い黒いタンイチはじめ順ぐりに十人だけ手をあげました。

「よろしい。すると十人目の貴さまが一番悪い。監獄にはいれ。」

「いいえ。どういたしまして。私はただフクジロのマッチを売っていることを遠くから見ているだけでございます。それを十円に売るなんて、めっそうな、私は一向に存じません。」

「どうもこれはずいぶん不愉快（ふゆかい）な事件だね。よろしい。そんならフクジロがマッチを十円で売るということを知っているものは手をあげ。」

硬い黒いタンイチからただ三人でした。
「するとお前だ。監獄にはいれ。」とネネムが云いました。
「それはさっきも申しあげました。私はただ命令で見ていただけです。」
「するとお前は十円に売ることは知っている、けれどもただ云いつかっているだけだというのだな、それから次のお前は云いつけてはいる。けれども十円に売れなんて云ったおぼえもなし又十円に売っているとも思わない、ただまあ、フクジロがよちよち家を出たりはいったりして、それでよくこんなにもうかるもんだと

思っていたと、こうだろう。」

「全くご名察の通り。」と二人が一緒に云いました。

「よろしい。もうわかった。お前がたに云い渡(わた)す。これは順ぐりに悪いことがたまって来ているのだ。百年も二百年もの前に貸した金の利息を、そんなハイカラななりをして、毎日ついてあるいてとるということは、けしからん。殊(こと)にそれが三十人も続いているというのは実にいけないことだ。おまえたちはあくびをしたりいねむりをしたりしながら毎日を暮(くら)して食事の時間だけすぐ近くの料理屋にはいる、それから急いで出て来て前の者がまだあまり遠くへ行っていないのを見て

やっと安心するなんという実にどうも不届きだ。それからおれがもうけるんじゃないと云うので、悪いことをぐんぐんやるのもあまりよくない。だからみんな悪い。みんなを罪にしなければならない。けれどもそれではあんまりかあいそうだから、どうだ、みんな一ぺんに今の仕事をやめてしまえ。そこでフクジロはおれがどこかの玩具（おもちゃ）の工場の小さな室（へや）で、ただ一人仕事をして、時々お菓子（かし）でもたべられるようにしてやろう。あとのものはみんな頑丈（がんじょう）そうだから自分で勝手に仕事をさがせ。もしどうしても自分でさがせなかったらおれの所に相談に来い。」

「かしこまりました。ありがとうございます。」みんなはフクジロをのこして赤山のような人をわけてちりぢりに逃(に)げてしまいました。そこでネネムは一人の検事をつけてフクジロを張子(はりこ)の虎(とら)をこさえる工場へ送りました。

見物人はよろこんで、

「えらい裁判長だ。えらい裁判長だ。」とときの声をあげました。そこでネネムは又巡視(またじゅんし)をはじめました。

それから少し行きますと通りの右側に大きな泥(どろ)でかためた家があって世界警察長官邸(かんてい)と看板が出て居りました。

「一寸はいって見よう。」と云いながらネネムは玄関（げんかん）に立ちました。その家中が俄（にわ）かにザワザワしてそれから警察長がさきに立って案内しました。一通り中の設備を見てからネネムは警察長と向い合って一つのテーブルに座りました。警察長は新聞のくらいある名刺（めいし）を出してひろげてネネムに恭々（うやうや）しくよこしました。見ると、

ケンケンケンケンケンケンケン・クエク警察長

と書いてあります。ネネムは

「はてな、クエクと、どうも聞いたような名だ。一寸突然ですがあなたはこの近在の農家のご出身ですか。」

と云いました。

するとと警察長はびっくりしたらしく、

「全くご明察の通りです。」と答えました。

「それではあなたは無断で家から逃げておいでになりましたね。お母さんが大へん泣いておいでですよ。」

とネネムが云いました。

「いや、全く。実は昨晩も電報を打ちましたようなわけで、実はその、逃げたというわけでもありません。丁度一昨昨日の朝、一寸した用事で家から大学校の小使室まで参りましたのですが、ついそのフゥフィーボー博士の講義につり込まれまして昨日まで三日とい

うもの、聴いたり落第したり、考えたりいたしました。昨晩やっと及第いたしましてこちらに赴任いたしました。」

「ハッハッハ。そうですか。それは結構でした。もう電報をおかけでしたか。」

「はい。」

　そこでネネムも全く感服してそれから警察長の家を出てそれから又グルグルグルグルグル巡視をして、おひるごろ、ばけもの世界裁判長の官邸に帰りました。おひるのごちそうは藁のオムレツでした。

四、ペンネンネンネンネン・ネネムの安心

ばけもの世界裁判長、ペンネンネンネンネン・ネネムの評判は、今はもう非常なものになりました。この世界が、はじめ一疋（ぴき）のみじんこから、だんだん枝（えだ）がついたり、足が出来たりして発達しはじめて以来、こんな名判官は実にはじめてだとみんなが申しました。

シャァロンというばけものの高利貸でさえ、ああ実にペンネンネンネンネン・ネネムさまは名判官だ、ダニーさまの再来だ、いやダニーさまの発達だとほめた位です。

ばけもの世界長からは、毎日一つずつ位をつけて来ましたし、勲章（くんしょう）を贈（おく）ってよこしましたので、今はその位を読みあげるだけに二時間かかり、勲章はネネムの室（へや）の壁（かべ）一杯になりました。それですから、何かの儀式（ぎしき）でネネムが式辞を読んだりするときは、その位を読むのがつらいので、それをあらかじめ三十に分けて置いて、三十人の部下に一ぺんにがやがやと読み上げて貰（もら）うようにしていましたが、それでさえやはり四分はかかりました。勲章だってその通りです。どうしてネネムの胸につけ切れるもんではありませんでしたから、ネネムの大礼服の上着は、胸の処（ところ）から長さ十米（メートル）ば

かりの切れがずうと続いて、それに勲章をぞろっとつけて、その帯のようなものを、三十人の部下の人たちがぞろぞろ持って行くのでした。さてネネムは、この様な大へんな名誉(めいよ)を得て、そのほかに、みなさんももうご存知でしょうが、フゥフィーボー博士のほかに、誰(たれ)も決して喰べてならない藁のオムレツまで、ネネムは喰べることを許されていました。それですから、誰が考えてもこんな幸福なことがない筈(はず)だったのですが、実はネネムは一向面白くありませんでした。それというのは、あのネネムが八つの飢饉(ききん)の年、お菓子の籠(かご)に入れられて、「おおホイホイ、おおホイホイ。」と云い

ながらさらって行かれたネネムの妹のマミのことが、一寸も頭から離れなかった為です。

そこでネネムは、ある日、テーブルの上の鈴をチチンと鳴らして、部下の検事を一人、呼びました。

「一寸君にたずねたいことがあるのだが。」

「何でございますか。」

「膝やかかとの骨の、まだ堅まらない小さな女の子をつかう商売は、一体どんな商売だろう。」

検事はしばらく考えてから答えました。

「それはばけもの奇術でございましょう。ばけもの奇術師が、よく十二三位までの女の子を、変身術だと申

して、ええこんどは犬の形、ええ今度は兎（うさぎ）の形などと、ばけものをしんこ細工のように延ばしたり円めたり、耳を附（つ）けたり又とったり致（いた）すのをよく見受けます。」

「そうか。そして、そんなやつらは一体世界中に何人位あるのかな。」

「左様。一昨年の調べでは、奇術を職業にしますものは、五十九人となって居（お）りますが、只今（ただいま）は大分減ったかと存ぜられます。」

「そうか。どうもそんなしんこ細工のようなことをするというのは、この世界がまだなめくじでできていたころの遺風だ。一寸視察に出よう。事によると禁止を

しなければなるまい。」

そこでネネムは、部下の検事を随(したが)えて、今日もまちへ出ました。そして検事の案内で、まっすぐに奇術大一座のある処に参りました。奇術は今や丁度まっ最中です。

　ネネムは、検事と一緒(いっしょ)に中へはいりました。楽隊が盛(さか)んにやっています。ギラギラする鋼(はがね)の小手だけつけた青と白との二人のばけものが、電気決闘(けっとう)というものをやっているのでした。剣(けん)がカチャンカチャンと云うたびに、青い火花が、まるで箒(ほうき)のように剣から出て、二人の顔を物凄(ものすご)く照らし、見物のものはみんなはらは

らしていました。
「仲々勇壮だね。」とネネムは云いました。
そのうちにとうとう、一人はバアと音がして肩から胸から腰へかけてすっぽりと斬られて、からだがまっ二つに分れ、バランチャンと床に倒れてしまいました。
斬った方は肩を怒らせて、三べん刀を高くふり廻し、紫色の烈しい火花を揚げて、楽屋へはいって行きました。
すると倒れた方のまっ二つになったからだがバタッと又一つになって、見る見る傷口がすっかりくっつき、ゲラゲラゲラッと笑って起きあがりました。そして頭

をほんのすこし下げてお辞儀をして、
「まだ傷口がよくくっつきませんから、粗末(そまつ)なおじぎでごめんなさい。」と云いながら、又ゲラゲラゲラッと笑って、これも楽屋へはいって行きました。

　ボロン、ボロン、ボロロン、とどらが鳴りました。一つの白いきれを掛(か)けた卓子(テーブル)と、椅子(いす)とが持ち出されました。眼のまわりをまっ黒に塗(ぬ)った若いばけものが、わざと少し口を尖(とが)らして、テーブルに座(すわ)りました。白い前掛をつけたばけものの給仕が、さしわたし四尺ばかりあるまっ白の皿(さら)を、恭々しく持って来て卓子の上に置きました。

「フォーク！」と椅子にかけた若ばけものがテーブルを叩きつけてどなりました。
「へい。これはとんだ無調法を致しました。ただ今、すぐ持って参ります。」と云いながら、その給仕は二尺ばかりあるホークを持って参りました。
「ナイフ！」と又若ばけものはテーブルを叩いてどなりました。
「へい。これはとんだ無調法を致しました。ただ今、すぐ持って参ります。」と云いながらその給仕は、幕のうしろにはいって行って、長さ二尺ばかりあるナイフを持って参りました。ところがそのナイフをテーブル

の上に置きますと、すぐ刃がくにゃんとまがってしまいました。

「だめだ、こんなもの。」とその椅子にかけたばけものは、ナイフを床に投げつけました。ナイフはひらひらと床に落ちて、パッと赤い火に燃えあがって消えてしまいました。

「へい。これは無調法致しました。ただ今のはナイフの広告でございました。本物のいいのを持って参ります。」と云いながら給仕は引っ込(こ)んで行きました。

するとどうもネネムも検事もだれもかれもみんな愕(おどろ)いてしまったことは、いつの間にか、どうして出て

来たのか、すてきに大きな青いばけものがテーブルに置かれた皿の上に、あぐらをかいて、椅子に座った若ばけものを見おろしてすまし込んでいるのでした。青いばけものは、しずかにみんなの方を向きました。眼のまわりがまっ赤です。俄（にわか）に見物がどっと叫（さけ）びました。

「テン・テンテンテンテン・テジマア！　うまいぞ。」

「ほう、素敵（すてき）だぞ。テジマア！」

テジマアと呼ばれた皿の上の大きなばけものは、顔をしずかに又廻して、椅子に座ったわかばけものの方を向きました。そして二人はまるで二匹の獅子（しし）のよう

に、じっとにらみ合いました。見物はもうみんな総立ちです。

「テジマア！　負けるな。しっかりやれ。」

「しっかりやれ。テジマア！　負けると食われるぞ。」

こんなような大さわぎのあとで、こんどはひっそりとなりました。そのうちに椅子に座った若ばけものは眼（め）が痛くなったらしく、とうとうまばたきを一つやりました。皿の上のテジマアはじりじりと顔をそっちへ寄せて行きます。若ばけものは又五つばかりつづけてまばたきをして、とうとうたまらなくなったと見えて、両手で眼を覆（おお）いました。皿の上のテジマアは落ちつい

てにゅうと顔を差し出しました。若ばけものは、がたりと椅子から落ちました。テジマアはすっくりと皿の上に立ちあがって、それからひらりと皿をはね下りて、自分が椅子にどっかり座りそれから床の上に倒れている若ばけものを、雑作もなく皿の上につまみ上げました。

　その時給仕が、たしかに金（かね）でできたらしいナイフを持って来て、テーブルの上に置きました。テジマアは一寸（ちょっと）うなずいて、ポッケットから財布（さいふ）を出し、半紙判の紙幣（しへい）を一枚引っぱり出して給仕にそれを握（にぎ）らせました。

「今度の旦那は気前が実にいいなあ。」とつぶやきながら、ばけもの給仕は幕の中にはいって行きました。そこでテジマアは、ナイフをとり上げて皿の上のばけものを、もにゃもにゃもにゃっと切って、ホークに刺して、むにゃむにゃむにゃっと喰ってしまいました。

その時「バア」と声がして、その食われた筈の若ばけものが、床の下から躍りだしました。

「君よくたっしゃで居て呉れたね。」と云いながら、テジマアはそのわかばけものの手を取って、五六ぺんぶらぶら振りました。

「テジマア、テジマア！」

「うまいぞ、テジマア！」みんなはどっとはやしました。

舞台の上の二人は、手を握ったまま、ふいっとおじぎをして、それから、

「バラコック、バララゲ、ボラン、ボラン、ボラン」

と変な歌を高く歌いながら、幕の中に引っ込んで行きました。

ボロン、ボロン、ボロロンと、どらが又鳴りました。

舞台が月光のようにさっと青くなりました。それからだんだんのんびりしたいかにも春らしい桃色に変りました。

まっ黒な着物を着たばけものが右左から十人ばかり大きなシャベルを持ったりきらきらするフォークをかついだりして出て来て

「おキレの角はカンカンカンカン
ばけもの麦はベランベランベラン
ひばり、チッチクチッチクチー
フォークのひかりはサンサンサン。」

とばけもの世界の農業の歌を歌いながら畑を耕したり種子を蒔いたりするようなまねをはじめました。たちまち床からベランベランと大きな緑色のばけもの麦の木が生え出して見る間に立派な茶色の穂を出し

小さな白い花をつけました。舞台は燃えるように赤く光りました。

「おキレの角はケンケンケン
　ばけもの麦はザランザララ
　とんびトーロロトーロロトー、
　鎌(かま)のひかりは　シンシンシンシン。」

とみんなは足踏(あしぶ)みをして歌いました。たちまち穂は立派な実になって頭をずうっと垂れました。黒いきもののばけものどもはいつの間にか大きな鎌を持っていてそれをサクサク刈(か)りはじめました。歌いながら踊(おど)りながら刈りました。見る見る麦の束(たば)は山のように舞台の

まん中に積みあげられました。
「おキレの角はクンクンクン
ばけもの麦はザック、ザック、ザ、
からすカーララ、カーララ、カー、
唐箕（とうみ）のうなりはフウラララフウ。」
みんなはいつの間にか棒を持っていました。そして麦束はポンポン叩かれたと思うと、もうみんな粒（つぶ）が落ちていました。麦稈（むぎから）は青いほのおをあげてめらめらと燃え、あとには黄色な麦粒の小山が残りました。みんなはいつの間にかそれを摺臼（すりうす）にかけていました。大きな唐箕がもう据（す）えつけられてフウフウフウフウと廻ってい

ました。
　舞台が俄かにすきとおるような黄金（きん）色になりました。立派なひまわりの花がうしろの方にぞろりとならんで光っています。それから青や紺や黄やいろいろの色硝子（いろガラス）でこしらえた羽虫が波になったり渦巻（うずまき）になったりきらきらきらきら飛びめぐりました。
　うしろのまっ黒なびろうどの幕が両方にさっと開いて顔の紺色な髪（かみ）の火のようなきれいな女の子がまっ白なひらひらしたきものに宝石を一杯（いっぱい）につけてまるで青や黄色のほのおのように踊って飛び出しました。見物はもうみんなきちがい鯨（くじら）のような声で

「ケテン！　ケテン！」とどなりました。

女の子は笑ってうなずいてみんなに挨拶(あいさつ)を返しながら舞台の前の方へ出て来ました。

黒いばけものはみんなで麦の粒をつかみました。

女の子も五六つぶそれをつまんでみんなの方に投げました。それが落ちて来たときはみんなまっ白な真珠(しんじゅ)に変っていました。

「さあ、投げ。」と云いながら十人の黒いばけものがみな真似(まね)をして投げました。バラバラバラバラ真珠の雨は見物の頭に落ちて来ました。

女の子は笑って何かかすかに呪(まじな)いのような歌をや

りながらみんなを指図しています。

ペンネンネンネンネン・ネネムはその女の子の顔をじっと見ました。たしかにたしかにそれこそは妹のペンネンネンネンネン・マミミだったのです。ネネムはとうとう堪（こら）え兼ねて高く叫びました。

「マミミ。マミミ。おれだよ。ネネムだよ。」

女の子はぎょっとしたようにネネムの方を見ました。それから何か叫んだようでしたが声がかすれてこっちまで届きませんでした。ネネムは又叫びました。

「おれだ。ネネムだ。」

マミミはまるで頭から足から火がついたようにはね

あがって舞台から飛び下りようとしましたら、黒い助手のばけものどもが麦をなげるのをやめてばらばら走って来てしっかりと押えました。

「マミミ。おれだ。ネネムだよ。」ネネムは舞台へはねあがりました。

幕のうしろからさっきのテジマアが黄色なゆるいガウンのようなものを着ていかにも落ち着いて出て参りました。

「さわがしいな。どうしたんだ。はてな。このお方はどうして舞台へおあがりになったのかな。」

ネネムはその顔をじっと見ました。それこそはあの

飢饉の年マミミをさらった黒い男でした。
「黙れ。忘れたか。おれはあの飢饉の年の森の中の子供だぞ。そしておれは今は世界裁判長だぞ。」
「それは大へんよろしい。それだからわしもあの時男の子は強いし大丈夫だと云ったのだ。女の子の方は見ろ。この位立派になっている。もうスタアと云うものになってるぞ。お前も裁判長ならよく裁判して礼をよこせ。」
「しかしお前は何故しんこ細工を興業するか。」
「いや。いやいややや。それは実に野蛮の遺風だな。この世界がまだなめくじでできていたころの遺風だ。」

「するとお前の処じゃしんこ細工の興業はやらんな。」

「勿論さ。おれのとこのはみんな美学にかなっている。」

「いや。お前は偉い。それではマミミを返して呉れ。」

「いいとも。連れて行きなさい。けれども本人が望みならまた寄越して呉れ。」

「うん。」

どうです。とうとうこんな変なことになりました。

これというのもテジマアのばけもの格が高いからです。

とにかくそこでペンネンネンネンネン・ネネムは

すっかり安心しました。

五、ペンネンネンネンネン・ネネムの出現

ペンネンネンネンネン・ネネムは独立もしましたし、立身もしましたし、巡視（じゅんし）もしましたし、すっかり安心もしましたから、だんだんからだも肥（ふと）り声も大へん重くなりました。

大抵の裁判はネネムが出て行って、どしりと椅子（いす）にすわって物を云おうと一寸唇（くちびる）をうごかしますと、もうちゃんときまってしまうのでした。

さて、ある日曜日、ペンネンネンネンネン・ネネムは三十人の部下をつれて、銀色の袍（ほう）をひるがえしながら丘へ行きました。

クラレという百合（ゆり）のような花が、まっ白にまぶしく光って、丘にもはざまにもいちめん咲いて居りました。ネネムは草に座って、つくづくとまっ青な空を見あげました。

部下の判事や検事たちが、その両側からぐるっと環（わ）になってならびました。

「どうだい。いい天気じゃないか。

ここへ来て見るとわれわれの世界もずいぶんしずか

だね。」ネネムが云いました。

みんなの影法師（かげぼうし）が草にまっ黒に落ちました。

「ちかごろは噴火（ふんか）もありませんし、地震（じしん）もありませんし、どうも空は青い一方ですな。」

判事たちの中で一番位の高いまっ赤な、ばけものが云いました。

「そうだね全くそうだ。しかし昨日サンムトリが大分鳴ったそうじゃないか。」

「ええ新報に出て居りました。サンムトリというのはあれですか。」

二番目にえらい判事が向うの青く光る三角な山を指

しました。

「うん。そうさ。僕の計算によると、どうしても近いうちに噴き出さないといかんのだがな。何せ、サンムトリの底の瓦斯の圧力が九十億気圧以上になってるんだ。それにサンムトリの一番弱い所は、八十億気圧にしか耐えない筈なんだ。それに噴火をやらんというのはおかしいじゃないか。僕の計算にまちがいがあるとはどうもそう思えんね。」

「ええ。」

上席判事やみんなが一緒にうなずきました。その時向うのサンムトリの青い光がぐらぐらっとゆれました。

それからよこの方へ少しまがったように見えましたが、忽ち山が水瓜を割ったようにまっ二つに開き、黄色や褐色の煙がぷうっと高く高く噴きあげました。

それから黄金色の熔岩がきらきらきらと流れ出して見る間にずっと扇形にひろがりました。見ていたものは

「ああやったやった。」

とそっちに手を延して高く叫びました。

「やったやった。とうとう噴いた。」

とペンネンネンネンネン・ネネムはけだかい紺青色にかがやいてしずかに云いました。

　その時はじめて地面がぐらぐらぐらぐら、波のようにゆれ

「ガーン、ドロドロドロドロドロドロ、ノンノンノンノン。」

と耳もやぶれるばかりの音がやって来ました。それから風がどうっと吹(ふ)いて行って忽ちサンムトリの煙は向うの方へ曲り空はますます青くクラレの花はさんさんとかがやきました。　上席判事が云いました。

「裁判長はどうも実に偉い。　今や地殻(ちかく)までが裁判長の神聖な裁断に服するのだ。」

　二番目の判事が云いました。

「実にペンネンネンネンネン・ネネム裁判長は 超怪(ちょうかい)

である。私はニイチャの哲学が恐らくは裁判長から暗示を受けているものであることを主張する。」

みんなが一度に叫びました。

「ブラボオ、ネネム裁判長。ブラボオ、ネネム裁判長。」

ネネムはしずかに笑って居りました。その得意な顔はまるで青空よりもかがやき、上等の瑠璃よりも冴えました。そればかりでなく、みんなのブラボオの声は高く天地にひびき、地殻がノンノンノンノンとゆれ、やがてその波がサンムトリに届いたころ、サンムトリがその影響を受けて火柱高く第二の爆発をやりました。

「ガーン、ドロドロドロドロ、ノンノンノンノン。」

それから風がどうっと吹いて行って、火山弾や熱い灰やすべてあぶないものがこの立派なネネムの方に落ちて来ないように山の向うの方へ追い払ったのでした。ネネムはこの時は正によろこびの絶頂でした。とうとう立ちあがって高く歌いました。

「おれは昔は森の中の昆布取り、
その昆布網が空にひろがったとき
風の中のふかやさめがつきあたり
おれの手がぐらぐらとゆれたのだ。

おれはフウフィーヴオ博士の弟子(でし)
博士はおれの出した筆記帳を
あくびと一しょにスポリと呑(の)みこんだ。
それから博士は窓から飛んで出た。

おれはむかし奇術師のテジマアに
おれの妹をさらわれていた。
その奇術師のテジマアのところで
おれの妹はスタアになっていた。

いまではおれは勲章(くんしょう)が百ダアス

藁（わら）のオムレツももうたべあきた。
おれの裁断には地殻も服する
サンムトリさえ西瓜（すいか）のように割れたのだ。」

さあ三十人の部下の判事と検事はすっかりつり込まれて一緒に立ち上がって、
「ブラボオ、ペンネンネンネンネン・ネネム
ブラボオ、ペンペンペンペンペン・ペネム。」
と叫びながら踊りはじめました。
「フィーガロ、フィガロト、フィガロット。」
クラレの花がきらきら光り、クラレの茎（くき）がパチンパ

チンと折れ、みんなの影法師はまるで戦のように乱れて動きました。向うではサンムトリが第三回の爆発をやっています。

「ガアン、ドロドロドロドロ、ノンノンノンノン。」

黄金（きん）の熔岩（ようがん）、まっ黒なけむり。

「フィーガロ、フィガロト、フィガロット。」

ペンネンネンネンネン・ネネム裁判長
その威（い）オキレの金角とならび
まひるクラレの花の丘に立ち
遠い青びかりのサンムトリに命令する。

青びかりの三角のサンムトリが
たちまち火柱を空にささげる。
風が来てクラレの花がひかり
ペンネンネンネンネン・ネネムは高く笑う。
　ブラボオ。ペンネンネンネンネン・ネネム
　ブラボオ、ペンペンペンペンペン・ペネム。」

その時サンムトリが丁度第四回の爆発をやりました。
「ガアン、ドロドロドロドロドロ、ノンノンノンノンノン。」
ネネムをはじめばけものの検事も判事もみんな夢中(むちゅう)になって歌ってはねて踊(おど)りました。
「フィーガロ、　フィガロト、　フィガロット。

風が青ぞらを吼(ほ)えて行けば
そのなごりが地面に下って
クラレの花がさんさんと光り
おれたちの袍(ほう)はひるがえる。
さっきかけて行った風が
いまサンムトリに届いたのだ。
そのまっ黒なけむりの柱が
向うの方に倒(たお)れて行く。
フィーガロ、フィガロト、フィガロット。
　ブラボオ、ペンネンネンネンネン・ネネム
　ブラボオ、ペンペンペンペンペン・ペネム。

おれたちの叫び声は地面をゆすり
その波は一分に二十五ノット
サンムトリの熱い岩漿（がんしょう）にとどいて
とうとうも一度爆発をやった。
フィーガロ、フィガロト、フィガロット。
フィーガロ、フィガロト、フィガロット。」

ネネムは踊ってあばれてどなって笑ってはせまわりました。

その時どうしたはずみか、足が少し悪い方へそれました。

　悪い方というのはクラレの花の咲いたばけもの世界の野原の一寸（ちょっと）うしろのあたり、うしろと云うよりは少し前の方でそれは人間の世界なのでした。

「あっ。裁判長がしくじった。」

と誰（たれ）かがけたたましく叫んでいるようでしたが、ネネムはもう頭がカアンと鳴ったまままっ黒なガツガツした岩の上に立っていました。

　すぐ前には本当に夢（ゆめ）のような細い細い路（みち）が灰色の苔（こけ）の中をふらふらと通っているのでした。そらがまっ白でずうっと高く、うしろの方はけわしい坂で、それも間もなくいちめんのまっ白な雲の中に消えていました。

どこにたった今歌っていたあのばけもの世界のクラレの花の咲いた野原があったでしょう。実にそれはネパールの国からチベットへ入る峠(とうげ)の頂だったのです。

ネネムのすぐ前に三本の竿(さお)が立ってその上に細長い紐(ひも)のようなぼろ切れが沢山(たくさん)結び付けられ、風にパタパタパタパタ鳴っていました。

ネネムはそれを見て思わずぞっとしました。

それこそはたびたび聞いた西蔵(チベット)の魔除(まよ)けの幡(はた)なのでした。ネネムは逃(に)げ出しました。まっ黒なけわしい岩の峯(みね)の上をどこまでもどこまでも逃げました。

ところがすぐ向うから二人の巡礼(じゅんれい)が細い声で歌を

歌いながらやって参ります。ネネムはあわててバタバタバタバタもがきました。何とかして早くばけもの世界に戻（もど）ろうとしたのです。

巡礼たちは早くもネネムを見つけました。そしてびっくりして地にひれふして何だかわけのわからない呪文（じゅもん）をとなえ出しました。

ネネムはまるでからだがしびれて来ました。そしてだんだん気が遠くなってとうとうガーンと気絶してしまいました。

ガーン。

それからしばらくたってネネムはすぐ耳のところで

「裁判長。裁判長。しっかりなさい、裁判長。」という声を聞きました。おどろいて眼を明いて見るとそこはさっきのクラレの野原でした。

三十人の部下たちがまわりに集まって実に心配そうにしています。

「ああ僕はどうしたんだろう。」

「只今（ただいま）空から落ちておいででございました。ご気分はいかがですか。」

上席判事が尋（たず）ねました。

「ああ、ありがとう。もうどうもない。しかしとうとう僕は出現してしまった。

僕は今日は自分を裁判しなければならない。

ああ僕は辞職しよう。それからあしたから百日、ばけものの大学校の掃除(そうじ)をしよう。ああ、何もかにもおしまいだ。」

ネネムは思わず泣きました。三十人の部下も一緒に大声で泣きました。その声はノンノンノンノンと地面に波をたて、それが向うのサンムトリに届いたころサンムトリが赤い火柱をあげて第五回の爆発をやりました。

「ガアン、ドロドロドロドロドロ。」

風がどっと吹いて折れたクラレの花がプルプルとゆ

れました。〔以下原稿なし〕

底本：「ポラーノの広場」新潮文庫、新潮社
1995（平成7）年2月1日発行
1997（平成9）年5月25日3刷
底本の親本：「新修宮沢賢治全集　第九巻　童話」筑摩書房
1979（昭和54）年7月15日初版第1刷発行
※〔〕内は、底本の注記です。
入力：土屋隆
校正：鈴木厚司
2010年2月1日作成
青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。